
放課後セルフヘイト

亜倉 暮亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後セルフヘイト

【Nコード】

N5191BA

【作者名】

亜倉 暮亜

【あらすじ】

私の視界の上の方で、細く白い脚が揺れている 放課後に日誌を書くお話。

学園ヘタリアでによた化。リトアニアさんがちょっと病んでるかもしれない。

突発的に書いたもの。

一応片方は女体化してるので、BL注意はしていません。

(前書き)

* 人物紹介*

日本の普通の学校という設定なので、一部キャラ名前も日本人っぽいのを勝手に作りました。

あと、原作にて既出の女体化とは設定が異なります。基本的に顔も性格もそのままです。

・リトアニア

作中では『リト』というあだ名。よた化しています。

・ポーランド

作中では『ポー』というあだ名。よた化はしていません。だが女装少年。

・里弥^{リヤ}

ベラルーシのこと。男体化しています。
名前は人名『ナターリヤ』より。

・ロシア

によた化しています。

ベラルーシは名前だけ、ロシアは存在だけしか出てきません。

以上大丈夫そうならどうぞ。

私の視界の上の方で、細く白い脚が揺れている。

「何書いとんよー」

「日誌。見れば分かるでしょ」

「じゃなくて、日誌にそんなに書くことあるんけ？って言ってんよ」

「あるよ」

私とポー以外誰もいない放課後の教室で、顔も上げずに会話する。以前にポーが書いたらしいページが、書き漏らしの空欄はあるわ落書きはあるわ、挙げ句の果てに記入者の名前欄に『ぽーさま』と書いてある始末だったことを思い出す。

本当を言うと日誌にそんなに書くことなんてない。けれど、私は不必要なまでに詳細な情報を書き込む。

民家の周辺に生息しているので家を守ると書くヤモリはハチユウ
ルイなのだそうです。

生物、と書いた欄の隣の長方形に、小さな文字を羅列していく。

私の前の机に腰掛けたポアの、短いスカートから覗く透き通るように白くて華奢な脚が、まざまざと私に見せつけるように近付いては離れてゆく。男の子のポアは、女の子の私より小さくてかわいい。

「へんなの」

流石にポアだって、私の書く量が異常であることには気付いているのだらう。でもそれきり何も言わず、ただ脚を揺らしている。私を待っている。私と一緒に帰る時間を待っている。

「さき帰っていいよ」

「帰る訳ないし」

不毛な会話だった。私は彼がそう答えることを知っていたし、彼も私がこう言うだろうことを知っていた。実に不毛な会話だった。

井戸等に生息しているので井を守ると書くイモリはリョウセイイルイなのだそうです。

「こん、と私の机をポアのローファーが小突いた。あ、と同時に聞こえて、ごめんだし、と小さな声が続いた。」

しかし私としては、ヤモリモイモリも外見上それほど差があるように思えず、そして辞書によるとハチユウルの定義は『這い歩く動物』だったので、実質それらの生物の構造的な違いはほとんど無いのではないのでしょうか。

と書いて消した。日誌に私情を挟む必要はない。と考えて、そもそここまで詳しい情報を書く必要もないことを思い出した。

私の視界の上で、さっきまで揺れていた脚が、今はだらりとぶら下がっている。

よく見れば案外、細いけども少年らしい筋肉のついた　そしてきれいな脚だ。

そういえば彼もきれいな脚をしていた。私の大好きな彼。ポーほどではないけど細くて、ポーよりも骨ばっていて、そして白くて長い脚。彼の脚は、体操服のハーフパンツから伸びていた。

彼にも好きな人がいる。絶対に彼を振り向くことのない人に、強烈で熱烈な愛を抱いている。だから彼もまた、私にとって絶対に振り向くことのない人なのである。

私は彼に愛される彼女が、愛されているのにことごとく拒絶する彼女が、憎くてたまらなかった。彼女が彼の愛を拒絶できるのは、拒絶されてもなお彼は愛し続けると分かっているからだ。確証のある確実な愛であると分かっているからだ。

彼女は彼をなんだと思っているのか。

だから憎い。彼女が憎くて、同時に私は絶望を覚えなければなら
ない。

さつき机を蹴ってしまって謝ったのに対し、私が無反応だったか
らだろうか。

「今、何考えとるん？」とポーは言った。

「里弥くんのこと」

「どんな感じ？」

「幸せだけど辛くてしょうがない」

彼のことを考えていると幸せだけど、同時に心の奥が鈍く痛むの
を感じる。そしてそれをはっきり自覚すれば、途端にとても鋭い痛
みに変わるのだ。

「おれも、」

脚が、僅かに近づいた。

「幸せだけど辛くてしょうがない」

息みたいな小さな声で、どうやら独り言のようだった。

なのに私は耳ざとく聞きつけて、言葉を返した。

「なんで？」

好きな人でもいるの？ポーには。

あたかも本当に疑問であるかのように、私は言った。

案外、ルーツはヤモリもイモリも同じなのかもしれません。

消しゴムを手取る。

「好きな人ぐらい、いるし」

「えー、誰ー？」

何も知らない、ふりをした。

がたん、と視界の上の景色が変わる。細すぎる太ももが、そこにはあった。

「リトのあほ」

顔を上げた。既にポーは走り出していた。教室の扉を勢いよく開けて、閉めがてらに私をきつと睨んだ。

「ばかつ！たこつ！リトなんか頭からチューリップはえたらいいしっ！もうさき帰るんだしっ！」

ばたんっ。乱暴に閉まった扉の向こうから、ばたばたというポーの足音が聞こえ、やがて小さくなっていった。

きよとんとしてみる。

「…なんでチューリップ？」

これは本音。

私はポーが、私を好きであることを、もう随分前から知っている。

9

そうしてポーが、本当に先に帰ることなど無いと知っている。

だから安心して、知らないふりができるのだ。絶望的でありながら、大好きな彼を大好きなままでいられるのだ。

だってポーはいつでも私を好きで、愛してくれるのだから。

ヤモリと、イモリは、

はたと気付く。シャーペンの芯がぼきりと音をたてて折れた。

拒絶こそしていないものの、ポールの確証のある確実な愛を受け取らずに享受している私は、彼の確証のある確実な愛を拒む、憎い憎い彼女とほとんど同じなのだ。

いや、私は拒絶だっと思っている。知らないふりをするのだって、ポールの愛への立派な拒絶ではないか。

例え本当に取り返しがつかないくらいに彼への私の思いが絶望的になったとしても。

ポールのところに帰ってこられるから。

ヤモリと、イモリは、

ぜんぜんチガイキモノです。

シャーペンの芯は折れたままで書けなくて、だから私は消しゴムで書いたものすべてを消した。

ヤモリとイモリは、オナジイキモノだと何度も書きかけたすべて

を、消して消して消した。

私はポーをなんだと思っているのか。

全部きれいに消えても消し続けて、紙がくしゃくしゃになっても消し続けて、びりびりに破けるまで消し続けた。

それでもヤモリとイモリはオナジイキモノだと思っていた私の頭は、私と憎い彼女がチガウイキモノだとは認められなかった。

ボロボロになったページを破り取ってくしゃくしゃに丸めた。律儀な私はもう一度、今度は必要最低限だけの情報を書いて日誌を閉じた。

「終わったよ」

「じゃあさっさと帰る用意するんだし」

扉の向こうからくぐもった声が返ってきた。

私は急いで筆記用具を鞆につめて、その鞆とポーが置いていった鞆と日誌と、それから丸めた紙を持ってポーの所へと向かった。

「待たせてごめん」

「ほんとだしー、リトまじ遅すぎー」

「うん」

丸めた紙を扉横にあるゴミ箱に棄てて、私はポーの隣へと並ぶ。

「ヤモリとイモリってどう違うと思う？」

「なにそれ？知らんし」

「ヤモリは家を守るって書くんだ。それでハチュウルイなの。で、イモリは井戸の守るって書いて、リヨウセイルイなんだ」

私は何故か、とても熱心に言い聞かせる。

ポーは分かったのか分からなかったのか、釈然としない顔をする。

「とにかく、違うんだって」

私は、同じに、思うけど。と付け足した。

私は一体、ポーにどう答えてほしいのだ。

ポーはかわいらしくこてんと頭を傾げて、

「んー、分からん。でも違うんよな」と言った。

違うのは分かったんだしー。

そうだよね。そうだよね。

私はしつこく頷いた。

(後書き)

見た目はそっくりですが、ヤモリとイモリは構造的にかなり違うと言ってもいいと思います。肺呼吸と皮膚呼吸ですし、根本的に違う生き物なのでしょう。

むしろなぜあんなに見た目が似ているのか不思議です…。

作中での描写は、事実ではなくあくまでリトアニアの考察です。実際は違うのだという事実が、リトアニアを陰ながら救っている事実であるという意味もあったり。

こんな話を書きつつも、基本的にリトアニアは純真な子であるのが好きです。このお話はif。

あとポーランドが女装少年なのはただの趣味です()

ここまで読んでくださり、ありがとうございました^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5191ba/>

放課後セルフヘイト

2012年1月14日12時55分発行